日蓮大聖人御書全集

兄弟抄（きょうだいしょう）

新版
1468
〜
1481

兄弟抄

建治2年('76)4月　55歳　池上宗仲・池上宗長

夫れ、法華経と申すは、八万法蔵の肝心、十二部経の骨髄なり。三世の諸仏はこの経を師として正覚を成じ、十方の仏陀は一乗を眼目として衆生を引導し給う。

今、現に経蔵に入ってこれを見るに、後漢の永平より唐の末に至るまで渡れるところの一切経論に二本あり。いわゆる旧訳の経は五千四十八巻なり。新訳の経は七千三百九十九巻なり。彼の一切経は皆各々分々に随っ

て我第一なりとなのれり。しかれども、法華経と彼の経々とを引き合わせてこれを見るに、勝劣天地なり、高下雲泥なり。彼の経々は衆星のごとく、法華経は月のごとし。彼の経々は灯炬・星月のごとく、法華経は大日輪のごとし。これは総なり。

別して経文に入ってこれを見奉れば、二十の大事あり。第一第二の大事は、三千塵点劫・五百塵点劫と申す二つの法門なり。その三千塵点と申すは、第三の巻の化城喩品と申す処に出でて候。この三千大千世界を抹して塵となし、

東方に向かって千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、また千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、かくのごとく三千大千世界の塵を下しはてぬ。さて、かえって下せる三千大千世界と下さざる三千大千世界をともにおしふさねてまた塵となし、この諸の塵をもってならべおきて、一塵を一劫として、経尽くしては、また始めまた始め、かくのごとく上の諸の塵の尽くし経たるを三千塵点とは申すなり。

今、三周の声聞と申して、舎利弗・迦葉・阿難・羅云なんど申す人々は、過去遠々劫・三千塵点劫のそのかみ、

大通智勝仏と申せし仏の第十六の王子にておわせし菩薩ましまし。かの菩薩より法華経を習いけるが、悪縁にすかされて法華経をすつる心つきにけり。かくして、あるいは華厳経へおち、あるいは般若経へおち、あるいは大集経へおち、あるいは涅槃経へおち、あるいは大日経、あるいは深密経、あるいは観経等へおち、あるいは阿含小乗経へおちなんどしけるほどに、次第に堕ちゆきて、後には人天の善根、後に悪におちぬ。かくのごとく堕ちゆくほどに、三千塵点劫が間、多分は無間地獄、少分は七大地獄、た

またまには一百余の地獄、まれには餓鬼・畜生・修羅なんどに生まれ、大塵点劫なんどを経て、人天には生まれ候いけり。

されば、法華経の第二の巻に云わく「**常に地獄に処すること、園観に遊ぶがごとく、余の悪道に在ること、己が舎宅のごとし**」等云々。十悪をつくる人は等活・黒縄なんど申す地獄に堕ちて五百生、あるいは一千歳を経、五逆をつくる人は無間地獄に堕ちて一中劫を経て、後はまたかえり生ず。いかなることにや候らん、法華経をすつる人は、す

つる時はさしも父母を殺すなんどのようにおびただしくは
みえ候わねども、無間地獄に堕ちては多劫を経候。たと
い父母を一人・二人・十人・百人・千人・万人・十万人・
百万人・億万人なんど殺して候とも、いかんが三千塵点
をば経候べき。一仏・二仏・十仏・百仏・千仏・万仏、
乃至億万仏を殺したりとも、いかんが五百塵点劫をば経
候べき。しかるに、法華経をすて候いけるつみによりて、
三周の声聞が三千塵点劫を経、諸大菩薩の五百塵点劫を
経候いけること、おびただしくおぼえ候。

栓　拳　痛

せんずるところは、拳をもって虚空を打つはくぶしいたからず、石を打つはくぶしいたし。悪人を殺すは罪あさし、善人を殺すは罪ふかし。あるいは他人を殺すは拳をもって泥を打つがごとし、父母を殺すは拳もて石を打つがごとし。鹿をほうる犬は頭われず、師子を吠うる犬は腸くさる。日月をのむ修羅は頭七分にわれ、仏を打ちし提婆は大地われて入りにき。所対によりて罪の軽重はありけるなり。

されば、この法華経は、一切の諸仏の眼目、教主釈尊の本師なり。一字一点もすつる人あれば、千万の父母を殺せ

る罪にもすぎ、十方の仏の身より血を出だす罪にもこえて候いけるゆえに、三・五の塵点をば経候いけるなり。この法華経はさておきたてまつりぬ。またこの経を経のごとくにとく人に値うことが難きにて候。たとい一眼の亀は浮き木には値うとも、はちすのいとをもって須弥山をば虚空にかくとも、法華経を経のごとく説く人にあいがたし。

されば、慈恩大師と申せし人は、玄奘三蔵の御弟子、太宗皇帝の御師なり。梵・漢を空にうかべ、一切経を胸にたたえ、仏舎利を筆のさきより雨らし、牙より光を放ち給いし

聖人なり。時の人も日月のごとく恭敬し、後の人も眼目とこそ渇仰せしかども、伝教大師これをせめ給うには、「法華経を讃むといえども、還って法華の心を死す」等云々。言は、彼の人の心には法華経をほむとおもえども、理のさすところは法華経をころす人になりぬ。善無畏三蔵は月支国のうじょうな国の国王なり。位をすて出家して、天竺五十余の国を修行して顕密二道をきわめ、後には漢土にわたりて玄宗皇帝の御師となる。尸那・日本の真言師、誰かこの人のながれにあらざる。かかるとうとき人なれど

も、一時に頓死して閻魔のせめにあわせ給う。いかなりけるゆえとも人しらず。日蓮これをかんがえたるに、本は法華経の行者なりしが、大日経を見て法華経にまされりといいしゆえなり。

されば、舎利弗・目揵連等が三・五の塵点劫を経しことは、十悪五逆の罪にもあらず、謀反八虐の失にてもあらず。ただ悪知識に値って法華経の信心をやぶりて権経にうつりしゆえなり。天台大師、釈して云わく「もし悪友に値わば則ち本心を失う」云々。「本心」と申すは、法華経

を信ずる心なり。「失う」と申すは、法華経の信心を引きかえて余経へうつる心なり。されば、経文に云わく「しかも良薬を与うれども、あえて服せず」等云々。天台云わく「その心を失う者は、良薬を与うといえども、しかもあえて服せず。生死に流浪し、他国に逃逝す」云々。

されば、法華経を信ずる人のおそるべきものは、賊人・強盗・夜打ち・虎狼・師子等よりも、当時の蒙古のせめよりも、法華経の行者をなやます人々なり。

この世界は第六天の魔王の所領なり。一切衆生は、無始

已来、彼の魔王の眷属なり。六道の中に二十五有と申すろうをかまえて一切衆生を入るるのみならず、妻子と申すほだしをうち、父母・主君と申すあみをそらにはり、貪・瞋・癡の酒をのませて仏性の本心をたぼらかす。ただ、あくのさかなのみをすすめて三悪道の大地に伏臥せしむ。

たまたま善の心あれば障礙をなす。法華経を信ずる人をばいかにもして悪へ堕とさんとおもうに、叶わざれば、ようやくすかさんがために相似せる華厳経へおとしつ。杜順・智儼・法蔵・澄観等これなり。また般若経へすか

しおとす悪友(あくゆう)は嘉祥(かじょう)・僧詮等(そうせんとう)これなり。また深密経(じんみつきょう)へすかしおとす悪友(あくゆう)は玄奘(げんじょう)・慈恩(じおん)これなり。また大日経(だいにちきょう)へすかしおとす悪友(あくゆう)は善無畏(ぜんむい)・金剛智(こんごうち)・不空(ふくう)・弘法(こうぼう)・慈覚(じかく)・智証等(ちしょうとう)これなり。また禅宗(ぜんしゅう)へすかしおとす悪友(あくゆう)は達磨(だるま)・慧可(えか)等これなり。また観経(かんぎょう)へすかしおとす悪友(あくゆう)は善導(ぜんどう)・法然(ほうねん)これなり。これは、第六天(だいろくてん)の魔王(まおう)が智者(ちしゃ)の身(み)に入(い)って善人(ぜんにん)をたぼら(誑)かすなり。法華経第五(ほけきょうだいご)の巻(まき)に「悪鬼入其身(あっきにゅうごしん)」と説(と)かれて候(そうろう)はこれなり。

たとい等覚(とうがく)の菩薩(ぼさつ)なれども、元品(がんぽん)の無明(むみょう)と申(もう)す大悪鬼身(だいあっきみ)に

入って、法華経と申す妙覚の功徳を障え候なり。いかにいわんや、その已下の人々においてをや。

また第六天の魔王、あるいは妻子の身に入って親や夫をたぼらかし、あるいは国王の身に入って法華経の行者をおどし、あるいは父母の身に入って孝養の子をせむることあり。悉達太子は位を捨てんとし給いしかば、羅睺羅はらまれておわしませしを、浄飯王「この子生まれて後、出家し給え」といさめられしかば、魔が子をおさえて六年なり。舎利弗は、昔、禅多羅仏と申せし仏の末世に菩薩の行を

立てて六十劫を経たりき。既に四十劫ちかづきしかば、百劫にてあるべかりしを、第六天の魔王、菩薩の行の成ぜんことをあぶなしとや思いけん、婆羅門となりて眼を乞いしかば、相違なくとらせたりしかども、それより退する心出来して、舎利弗は無量劫が間無間地獄に堕ちたりしぞかし。大荘厳仏の末の六百八十億の檀那等は、苦岸等の四比丘にたぼらかされて普事比丘を怨みてこそ、大地微塵劫が間無間地獄は経しぞかし。師子音王仏の末の男女等は、勝意比丘と申せし持戒の僧をたのみて喜根比丘

を笑ってこそ無量劫が間地獄に堕ちつれ。

今また日蓮が弟子檀那等はこれにあたれり。法華経には「如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。また云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」。涅槃経に云わく「**横しまに死殃に羅り、呵責・罵辱・鞭杖・閉繋・飢餓・困苦、かくのごとき等の現世の軽報を受けて、地獄に堕ちず**」等云々。般泥洹経に云わく「衣服足らず、飲食麤疎、財を求むるに利あらず、貧賤の家および邪見の家に生まれ、あるいは王難に遭い、および余の種々の人間の

苦報あらん。現世に軽く受くるは、これ護法の功徳力に由るが故なり」等云々。文の心は、我ら過去に正法を行じける者にあだをなしてありけるが、今かえりて信受すれば、過去に人を障げつる罪にて未来に大地獄に堕つべきが、**今生に正法を行ずる功徳強盛なれば、未来の大苦をまねきこして少苦に値うなり。**

この経文に、過去の誹謗によりてようようの果報をうくるなかに、あるいは貧家に生まれ、あるいは邪見の家に生まれ、あるいは王難に値う等云々。この中に「邪見の家」と申

すは誹謗正法の家なり。「王難」等と申すは悪王に生まれあうなり。この二つの大難は各々の身に当たっておぼえつべし。**過去の謗法の罪滅せんとて、邪見の父母にせめられさせ給う。また法華経の行者をあだむ国主にあえり。**経文明々たり、経文赫々たり。我が身は過去に謗法の者なりけること疑い給うことなかれ。これを疑って現世の軽苦忍びがたくて、慈父のせめに随って、存の外に法華経をすつるよしあるならば、我が身地獄に堕つるのみならず、悲母も慈父も大阿鼻地獄に堕ちて、ともにかなしまんこと疑いな

かるべし。大道心と申すはこれなり。

各々随分に法華経を信ぜられつるゆえに、過去の重罪をせめいだし給いて候。たとえば、鉄をよくよくきたえばきずのあらわるるがごとし。石はやけばはいとなる。金はやけば真金となる。

この度こそまことの御信用はあらわれて、法華経の十羅刹も守護せさせ給うべきにて候らめ。雪山童子の前に現ぜし羅刹は帝釈なり。尸毘王のはとは毘沙門天ぞかし。十羅刹、心み給わんがために、父母の身に入らせ給いてせめ給うこ

ともやあるらん。それにつけても、心あさからんことは後悔あるべし。

また前車のくつがえすは後車のいましめぞかし。今の世には、なにとなくとも道心おこりぬべし。この世のありさま、厭うともよも厭われじ。日本の人々、定めて大苦に値いぬと見えて候。眼前のことぞかし。文永九年二月の十一日に、さかんなりし花の大風におるるがごとく、清絹の大火にやかるるがごとくなりしに、世をいとう人のいかでかなかるらん。文永十一年の十月、ゆき・つしま・ふのものど

もの一時に死人となりしことは、いかに人の上とおぼすか。当時もかのうってに向かいたる人々のなげき、老いたる親おや、おさなき子、わかき妻、めずらしかりしすみかうちすてて、よしなき海をまぼり、雲のみうればはたかと疑い、つりぶねのみゆれば兵船かと肝心をけす。日に一・二度山へのぼり、夜に三・四度馬にくらをおく。現身に修羅道をかんぜり。

各々のせめられさせ給うことも、詮ずるところは国主の法華経のかたきとなれるゆえなり。国主のかたきとなるこ

とは、持斎等・念仏者等・真言師等が謗法よりおこれり。

今度にようじくらして法華経の御利生心みさせ給え。

日蓮もまた強盛に天に申し上げ候なり。いよいよ、へる心ね・すがたおわすべからず。定めて、女人は心ゆわきにておわすれば、ごぜんたちは心ひるがえりてやおわすらん。ごうじょうにはがみをして、たゆむ心なかれ。例せば、日蓮が平左衛門尉がもとにてうちふるまいいしがごとく、すこしもへる心なかれ。わだが子となりしもの、わかさのかみが子となりし、将門・貞任が郎従等となりし

者、仏になる道にはあらねども、はじをおもえば命おしまぬ習いなり。**なにとなくとも一度の死は一定なり。いろばしあしくて人にわらわれさせ給うなよ。**

あまりにおぼつかなく候えば、大事のものがたり一つ申す。伯い・叔せいと申せし者は、孤竹国の王の二人の太子なり。父の王、弟の叔せいに位をゆずり給いき。父しして後、叔せい位につかざりき。伯いが云わく「位につき給え」。叔せいが云わく「兄、位継ぎ給え」。伯いが云わく「いかに親の遺言をばたがえ給うぞ」と申せしかば、「親

の遺言はさることなれども、いかんが兄をおきては位には即くべき」と辞退せしかば、二人共に父母の国をすてて他国へわたりぬ。

周の文王につかえしほどに、文王、殷の紂王に打たれしかば、武王、百箇日が内いくさをおこしき。伯い・叔せいは、武王の馬の口にとりつきて、いさめて云わく「おやしして後、三箇年が内いくさをおこすは、あに不孝にあらずや」。武王いかりて伯い・叔せいを打たんとせしかば、太公望せいして打たせざりき。二人はこの王をうとみて、すようと

申す山にかくれいて、わらびをおりて命をつぎしかば、麻子と申す者ゆきあいて云わく「いかにこれにはおわするぞ」。二人上件のことをかたりしかば、麻子が云わく「さるにては、わらびは王の物にあらずや」。二人せめられて、その時よりわらびをくわず。天は賢人をすて給わぬならいなれば、天、白鹿と現じて乳をもって二人をやしないき。叔せいが云わく「この白鹿の乳をのむだにもうまし。まして肉」といいしかば、伯いせいせしかども、天これをききて来らず。二人うえて死ににき。**一生が間賢なりし人も一言に身**

もうやま　いんきょ　れいて　わらびをおりて　いのち　つぎしかば
ましもうもの　あいて　いわく　いかにこれにはおわする
ぞ　ふたりかみくだん　ことをかたりしかば　ましい　わく
るにては　わらびは　おうもの　にあらずや　ふたりせめられて
その　ときよりわらびをくわず　てんけんじん　たまわぬならい
なれば　てんはくろくげん　ちち　もって　ふたりをやしないき　しゅく
せいが　いわく　はくろくちち　のむだにもうまし　にく　して
といいしかば　いせいせしかども　てん　きて　きたらず
ふたりうえて　しにき　いっしょうあいだけん　ひといちごんみ

滅
をほろぼすにや。 各々も御心の内はしらず候えば、おぼつかなし、おぼつかなし。

釈迦如来は太子にておわせし時、父の浄飯王、太子を惜しみたてまつりて出家をゆるし給わず。四門に二千人の兵据守つわものをすえてまぼらせ給いしかども、終におやの御心違出をたがえて家をいでさせ給いき。**一切はおやに随うべきにてこそ候えども、仏になる道は随わぬが孝養の本にて候か。** されば、心地観経には孝養の本をとかせ給うには、「恩を棄てて無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり」等

云々。　言は、まことの道に入るには、父母の心に随わずして家を出でて仏になるが、まことの恩をほうずるにてはあるなり。

世間の法にも、父母の謀反なんどをおこすには、随わぬが孝養とみえて候ぞかし。孝経と申す外経に見えて候。天台大師も法華経の三昧に入らせ給いておわせし時は、父母、左右のひざに住して仏道をさえんとし給いしなり。これは天魔の父母のかたちをげんじてさうるなり。

伯い・すくせいが因縁はさきにかき候いぬ。また第一の

因縁あり。日本国の人王第十六代に王おわしき。応神天皇と申す。今の八幡大菩薩これなり。この王の御子二人ます。嫡子は仁徳、次男は宇治王子。天皇、次男・宇治王子に位をゆずり給いき。王、ほうぎょならせ給いて後、宇治王子云わく「兄、位につき給うべし」。兄の云わく「いかにおやの御ゆずりをばもちいさせ給わぬぞ」。かくのごとくたがいにろんじて、三箇年が間、位に王おわせざりき。万民のなげきいうばかりなし。天下のさいにてありしほどに、宇治王子云わく「我いきて有るゆえに、あに位に即か

せ給わず」といって死なせ給いにき。仁徳これをなげかせ給いて、またふししずませ給いしかば、宇治王子いきかえりて、ようようにおおせおかせ給いて、またひきいらせ給いぬ。さて、仁徳、位につかせ給いたりしかば、国おだやかなる上、しんら・はくさい・こうらいも日本国にしたがいて、ねんぐ八十そうそなえけるとこそみえて候え。

賢王のなかにも兄弟おだやかならぬれいもあるぞかし。いかなるちぎりにて兄弟かくはおわするぞ。浄蔵・浄眼の二人の太子の生まれかわりておわするか、薬王・薬上の

伏沈様々仰置引入返
新羅百済高麗日本国
年貢はちじっ艘供見例
賢王兄弟穏
契兄弟

二人か。大夫志殿の御おやの御勘気はうけたまわりしかども、ひょうえの志殿のことは今度はよもあにには付かせ給わじ。さるにては、いよいよ大夫志殿のおやの御不審は、おぼろけにてはゆりじなんどおもいて候えば、このわらわ〈鶴王〉の申し候はまことにてや。「御同心」と申し候えば、あまりのふしぎさに別の御文をまいらせ候。未来までのものがたり、なに事かこれにすぎ候べき。

西域と申す文にかきて候は、月氏に婆羅疵斯国施鹿林と申すところに一りの隠士あり。仙の法を成ぜんとおもう。

すでに瓦礫を変じて宝となし、人畜の形をかえけれども、いまだ風雲にのって仙宮にはあそばざりけり。このことを成ぜんがために、一りの烈士をかたらい、長刀をもたせて壇の隅に立てて、息をかくし、言をたつ。よいよりあしたにいたるまでものいわずば、仙の法成ずべし。仙を求むる隠士は、壇の中に坐して、手に長刀をとって口に神呪を誦ずうす。約束して云わく「たとい死なんとすることありとも、物言うことなかれ」。烈士云わく「死すとも、物いわじ」。かくのごとくしてすでに夜中をすぎて、よまさにあけなん

とす。いかんがおもいけん、あけんとする時、烈士おおきに声をあげてよばわる。すでに仙の法成ぜず。

隠士、烈士に云わく「いかに約束をばたがうるぞ。くち惜しきことなり」と云う。烈士歎いて云わく「少し眠ってありつれば、昔仕えし主人自ら来って責めつれども、師の恩厚ければ、忍んで物いわず。彼の主人怒って頸をはねんと云う。しかれども、またものいわず。ついに頸を切りつ。中陰に趣く我が屍を見れば、惜しく歎かし。しかれども、物いわず。ついに南印度の婆羅門の家に生まれぬ。入胎・出胎

するに、大苦忍びがたし。しかれども、息を出ださず。また物いわず。すでに冠者となりて妻をとつぎぬ。また親死しぬ。また子をもうけたり。かなしくもあり、よろこばしくもあれども、物いわず。かくのごとくして年六十有五になりぬ。我が妻かたりて云わく『汝もし物いわずば、汝がいとおしみの子を殺さん』と云う。時に我思わく『我すでに年衰えぬ。この子をもし殺されなば、また子をもうけがたし』と思いつるほどに、声をおこすとおもえば、おどろきぬ」と云いければ、師が云わく「力及ばず。我も汝も魔

誑にたぼらかされぬ。終にこのこと成ぜず」と云いければ、烈士大いに歎きけり。「我心よわくして師の仙の法を成ぜず」と云いければ、隠士が云わく「我が失なり。兼ねて誡めざりけることを」と悔ゆ。しかれども、烈士、師の恩を報ぜざりけることを歎いて、ついに思い死にししぬとかかれて候。

仙の法と申すは、漢土には儒家より出で、月氏には外道の法の一分なり。云うにかい無き仏教の小乗阿含経にも及ばず。いわんや通・別・円をや。いわんや法華経に及ぶべ

しや。かかる浅きことだにも、成ぜんとすれば四魔競って成じがたし。いかにいわんや、法華経の極理、南無妙法蓮華経の七字を始めて持たん日本国の弘通の始めならん人の弟子檀那とならん人々の大難の来らんことをば、言をもって尽くし難し。心をもっておしはかるべしや。

されば、天台大師の摩訶止観と申す文は、天台一期の大事、一代聖教の肝心ぞかし。仏法漢土に渡って五百余年、南北の十師、智は日月に斉しく、徳は四海に響きしかども、いまだ一代聖教の浅深・勝劣、前後・次第には迷惑してこ

そ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華経の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出だして、三国の一切衆生にあまねく与え給えり。この法門は、漢土に始まるのみならず、月氏の論師までも明かし給わぬことなり。しかれば、章安大師釈して云わく「止観の明静なることは、前代にいまだ聞かず」云々。また云わく「天竺の大論すら、なおその類いにあらず」等云々。

その上、摩訶止観の第五の巻の一念三千は、今一重立ち

入りたる法門ぞかし。この法門を申すには、必ず魔出来すべし。魔競わずば、正法と知るべからず。

第五の巻に云わく「行解既に勤めぬれば、三障四魔、紛然として競い起こる乃至随うべからず、畏るべからず。これに随えば、人を将いて悪道に向かわしむ。これを畏るれば、正法を修することを妨ぐ」等云々。この釈は、日蓮が身に当たるのみならず、門家の明鏡なり。謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ。

この釈に三障と申すは、煩悩障・業障・報障なり。

煩悩障と申すは、貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし。業障と申すは、妻子等によりて障礙出来すべし。報障と申すは、国主・父母等によりて障礙出来すべし。また四魔の中に天子魔と申すもかくのごとし。

今、日本国に「我も止観を得たり、我も止観を得たり」と云う人々、誰か三障四魔競える人あるや。「これに随えば、人を将いて悪道に向かわしむ」と申すは、ただ三悪道のみならず、人天、九界を皆悪道とかけり。されば、法華経を除いて華厳・阿含・方等・般若・涅槃・大日経等なり。

天台宗を除いて余の七宗の人々は、人を悪道に向かわしむる獄卒なり。天台宗の人々の中にも、法華経を信ずるようにて人を爾前へやるは、悪道に人をつかわす獄卒なり。今、二人の人々は隠士と烈士とのごとし。一りもかけなば成ずべからず。譬えば、鳥の二つの羽、人の両眼のごとし。

また二人の御前たちはこの人々の檀那ぞかし。**女人となることは、物に随って物を随える身なり。**夫たのしくば妻もさかうべし。夫盗人ならば妻も盗人なるべし。これひと

えに、今生ばかりのことにはあらず。世々生々に、影と身と、花と果と、根と葉とのごとくにておわするぞかし。木にすむ虫は木をはむ。水にある魚は水をくらう。芝かるれば蘭なく、松さかうれば柏よろこぶ。草木すら、かくのごとし。比翼と申す鳥は、身は一つにて頭二つあり。二つの口より入る物、一身を養う。ひぼくと申す魚は、一目ずつある故に、一生が間はなるることなし。夫と妻とは、かくのごとし。この法門のゆえには、たとい夫に害せらるるとも、悔ゆることなかれ。一同して夫の心をいさめば、竜女

が跡をつぎ、末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし。

かくのごとくおわさば、たといいかなることありとも、日蓮、二聖・二天・十羅刹・釈迦・多宝に申して、順次生に仏になしたてまつるべし。

「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」とは六波羅蜜経の文なり。たといいかなるわずらわしきことありとも、夢になして、ただ法華経のことのみさばくらせ給うべし。

中にも日蓮が法門は古こそ信じがたかりしが、今は前々いいおきしこと既にあいぬれば、よしなく謗ぜし人々も悔ゆ

る心(こころ)あるべし。

たといこれより後(のち)に信(しん)ずる男女(なんにょ)ありとも、各々(おのおの)にはかえ思(おも)うべからず。始(はじ)めは信(しん)じてありしかども、世間(せけん)のおそろしさに、すつる人々(ひとびと)かずをしらず。その中(なか)に、返(かえ)って本(もと)より謗(ぼう)ずる人々(ひとびと)よりも強盛(ごうじょう)にそしる人々(ひとびと)またあまたあり。在世(ざいせ)にも、善星比丘等(ぜんしょうびくとう)は、始(はじ)めは信(しん)じてありしかども、後(のち)にすつるのみならず、返(かえ)って仏(ほとけ)をぼうじ奉(たてまつ)りしゆえに、仏(ほとけ)も叶(かな)い給(たま)わず、無間地獄(むけんじごく)におちにき。

この御文(おんふみ)は別(べつ)してひょうえの志殿(こころざしどの)へまいらせ候(そうろう)。また

大夫志殿(たいふのさかんどの)の女房(にょうぼう)、兵衛志殿(ひゅえのさかんどの)の女房(にょうぼう)によくよく申(もう)しきかせさせ給(たも)うべし、きかせさせ給(たも)うべし。南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)。

四月(しがつ)　日(にち)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)